

# ハンガリー紀行

## 1. ブダペスト

### ゾーナタクシー

10月28日の日曜日、午後9時10分に無事ハンガリー・リスト・フェレンツ国際空港に着陸した。モスクワのシェレメーチエヴォ国際空港までは機内の大半を占めていた日本人だが、ブダペストまで来たのは私一人だった。預けておいた手荷物も、比較的早くターンテーブルで運ばれてくる。キャリーカートにセットし、いよいよハンガリーでの第一歩が始まる。

到着ロビーでもとにかくキャッシングしなければならない。必ずあるはずのATMを探してキョロキョロするとまず目に入ったのは警察官二人だ。彼等の所へ行き尋ねると、流暢な英語で、「お前のすぐ後ろだ。」と教えてくれる。最初からいささか見苦しい振る舞いとなったが、旅の恥はかき捨てで、とにかく札を云ってからキャッシング、40,000Ft(フォリント: 14,692円)を財布にしまう。

いよいよ17キロほど離れた市内への移動だ。事前調査からゾーナタクシー(コラム参照)を利用することにした。バス料金の四倍ぐらいになるけれど、バス停から宿まで知らない街の夜道を歩く危険性と苦労を秤にかけ、タクシーを選ぶ。四倍と云えども二千円くらいなのだ。

到着ロビーを出てすぐの所にブースがあり、インターネットのブッキングコムで予約した宿の予約票英文アウトプットを提示すると、バウチャーが手渡される。ブースのすぐ後ろにはゾーナタクシーが並び、3台目の車が指定されたものだった。

**ゾーナタクシー**  
空港で待っているのはゾーナタクシーと呼ばれるもので、若干料金が  
高い。しかし外国人でそれもハンガリーについてあまり知識がない旅  
行者には安心のシステムだ。専用の窓口で行き先を告げると、バウ  
チャーが渡される。これに利用するタクシーの番号と、ゾーンごとに定  
められた最大料金が印字されている。当該タクシーは付近で待機して  
いるので、番号で確認し乗り込む。  
運転手は料金メーターを作動させて走行するのでバウチャーより  
安ければそれで良いし、越えても最大料金以上払う必要は無い。地元  
の人やなれた旅行者ならば、もう少し安い一般のタクシーを電話で呼  
ぶこともできるらしい。

### VOUCHER

Kérjük őrizze meg reklamáció esetére!  
Please keep it for adjustment of complaint!  
Köszönjük, hogy igénybe vette szolgáltatásunkat!  
Thank you for using our service!



c79f45

Terminal/Terminal: T2B  
Kezelő/User: bartos.aniko  
Dátum/Date: 2012.10.28. 22:36:20

### TAXI: 1263 タクシー番号

Úticél/Destination:  
**Budapest, 5 ker.  
Pálvax köz (5) 1. (Pálvax Hotel) 行き先 (ホテル)**  
**2. KÖRZET/ZONE 2 ゾーン 2**

Max. fuvar díj/Max. transfer fare:  
5800 HUF 21.00 EUR

**TOTAL: 最大料金 5800 HUF 21.00 EUR**

Fizetési mód/Payment: **Készpénz/Cash**

高速道路ではないらしいが、道幅も広く空いていて走りやすい道路に行くこと20分ほどで街中に入る。しばらくして幹線道路を離れ、数回右左折を繰り返したところで停車した。そこから先は道幅は広いが車輛進入禁止らしく、運転手は、「お前の宿はあそこだ。」と50メートルほど先のネオンを指差して教えてくれた。料金メーターを見ると、バウチャー表示金額5,800Ftピッタリに近い。チップ込みで6,500Ft(2,387円)支払った。

薄暗いけれど不穏な雰囲気は全くない街路を歩き、インターネットのブッキングコムで予約したピルボックス・ホテルに入った。エントランスホールはどこか雑然とした感じがあり、「見込みより安ホテルだったか？」と思う。とにかくフロントへ行くと中年男が二人いて、どちらも流暢な英語を話す。チェックインする前に部屋を下見させて貰った。

荷物はフロントの前に置いたまま、案内されて階段を登る。用意されていた103号室は2階にあり、ロビーのほぼ真上に当たっていた。角部屋で二方向に大きな窓があり、室内も広々しているし、先ほど受けた印象とは裏腹に、快適な滞在ができそうだ。満足である旨を伝え、フロントへ戻った。

ブルガリアではパスポートを渡すと、宿泊カードへの記入などは向こうが全部やってくれた。しかし此処では名前やら住所などを書かされる。老眼鏡を取り出して記入を始めたが、日本の住所を真面目にアルファベットで書こうとすれば、かなり面倒だ。それにカードの当該欄は余程細かい字で記入しないと書ききれない。どうせこれが何かの役に立つことなどないものと、いい加減に省略した。書き終えて差し出すと一番下の方に署名しろと云われ、これは漢字で記入。ようやくチェックインを終えて荷物を部屋へ運ぶ。エレベーターはないが、二階だし荷物は軽いので問題ない。

部屋は予約時点で禁煙を指定したが、廊下にも、「禁煙」のステッカーが貼ってあるのは好ましく思えた。しかし穿った見方をすれば、ハンガリーの非喫煙状況はまだレベルが低いので、このようなものを掲示する必要があるのかもしれない。

部屋に荷物を置くと、カメラだけを持ってすぐ出かける。午後11時を廻っているから、食事できるとしても時間に余裕はない。フロントで訊くと、「多分駄目と思うが...」の保留着きで一軒教えてくれた。先ほどタクシーを下りた辺りで、確かにそれらしい店を目にした記憶がある。しかしいざ訪ねてみると、店内に灯りが点き客もいたものの、食事は終了して飲酒タイムになっていた。

予想はしていたことなので諦めも早い。しかし酒を割る水が欲しいので、フロントで訊いた食料

品店を探すが見付からない。結局ファーストフード店でミネラルウォーターを購入した。ひょっとするとフロントで教えてくれた24時間営業の店とは此処のことかもしれない。ともかく500ccのペットボトルで、炭酸入りとなしの二種類それぞれ520Ft(191円)だ。後は真っ直ぐ宿へ戻り晩酌を開始する。

食べ物はモスクワで調達したサンドイッチ260ルーブル(668円)と、カバンに詰めてきたオツマミ類。酒はこれもモスクワ調達のタンカレー・ジン1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>651.12ルーブル

(1,673円)だ。宿の前を時々歩行者が行き交うが、至って静かだった。日付が変わったころ、時差を含め32時間の長い一日を終え就寝する。



モスクワ調達のサンドイッチ。

## ブダペスト徘徊

夜中に何回か目を覚ましたが、6時半に起きてみると、いつの間にか曇りが降り出している。夜はすっかり明けていたものの、曇天のせいもあり見下ろす街路は薄暗い。7時になって朝食券を持ち朝食を摂りに1階へ降りた。食堂はロビーに隣接し、道路側は大きなガラス窓になっている。シーズン中は判らないが、この時期は朝食専用だった。ビュッフェ形式で品数は少ないけれど、私に取っては十分な品揃えだ。皿にハムとチーズ、チューフィンディングディッシュ(保温容器)からスクランブル

エッグとウィンナソーセージをとりわけ、さらにパン二枚を載せた。家では決して作るこ  
 のないスクランブルエッグだが、旅に出るとた  
 っぷり食べたくなる。たぶん卵三個分  
 ぐらいを取ったようだ。



朝食のハム、チーズとスクランブルエッグ。

簡単に朝食を終え部屋に戻ったが、雨  
 が降り続けているので外出は見合わせた。  
 小雨だし折り畳み傘も持参しているから、出ること  
 それほどの支障はないけれど、旅程に十分な余裕もある  
 のでのんびり行動したかった。

幸いと云うべきか、今回は海外旅行に初めてコン  
 ピュータを持参している。一般的にネットブックと呼ばれ  
 ている、小型、軽量、安価なものだ。そして宿にはWiFi  
 (ワイファイ:無線でのネットワーク接続共通規格)が導  
 入されているので、PCを立ち上げて簡単にインターネッ  
 ト接続ができる。メールをチェックしたのちに、ブダペス  
 ト観光に関する情報収集をした。

9時半に此处を宿泊延長することを思い出した。イン  
 ターネットを通じての予約だと、どんな宿か保証の限り  
 ではないから、一泊だけしか予約していなかった。しか  
 し一晩を過ごし、部屋の状態、静かでありながら便利な  
 立地などから、この宿に継続宿泊することに迷いはない。  
 フロントへ降りて行くと、係りは昨夜の男性から、愛想の  
 良い女の子に替わっていた。



泊まったシティ・ピルヴァックスの玄関前。歩行者専用道路で、歩  
 いている三人の背後に見えるのが朝食堂、その真上が泊まった  
 部屋。

ブダペスト市街平面図

0 ——— 400m

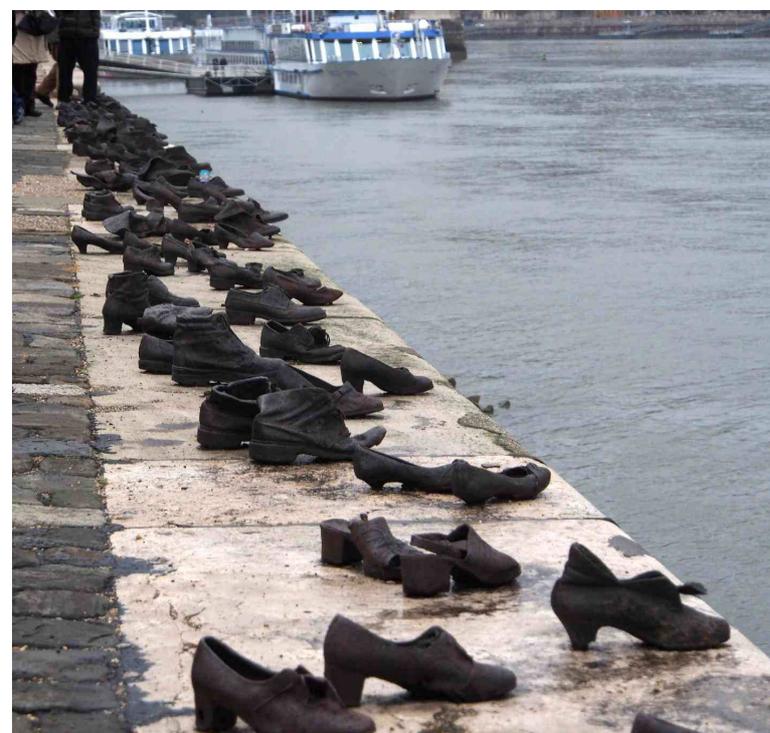


閑散期のせいかな、簡単に延長はでき、さらに良かったのはイン  
 ターネット予約より安くなったことだ。一泊当たり2,256Ft  
 (829円)も安くなったのは、ブッキングコムの手数料分だろう  
 か。昨年ブルガリアのソフィアで、やはりブッキングコム予約した  
 宿を追加宿泊したことがある。このときは安くならなかったが、フ  
 ロントの女の子に、「これから当ホテルを予約するときは、電話か  
 直接メールして。」と云われた。同じような理由だろうか。

曇から替わった雨も11時ころになり止んだようなので、おも  
 むろに出かける支度をした。カメラバッグには英文ガイドブック  
 (豪Lonely Planet社のもの。以下英ガイドと略記する)などもしま  
 い、これとジョイントするデイパックに念のため折り畳み傘を入  
 れた。



ドナウ河沿いの歩行者専用道路ではインフォなどの文字が書き込まれたパラソルの下で、(多分)市内循環観光バスの切符を売っている。このようなスタンドは、それから市内の随所で見かけることになった。



第二次世界大戦中にハンガリーのナチ党員により銃殺され、ドナウ川に捨てられたユダヤ人犠牲者の慰霊のために、ハンガリーの彫刻家ジュラ・ポウエ氏が造った鉄のモニュメント。

出掛けにフロントで市街平面図を貰い、これに現在位置を書き込んで貰う。ドナウ河に架かるエリザベト橋の方角を訊けば、これで進むべき方向が定まったことになる。後は歩き廻って徐々に土地勘の働く地域を広げて行けばよい。

宿の周りを一巡りしてからドナウ河畔へ向かった。この街では最大のランドマークと云うべきか、いろいろな見所へ行くにしても、この河を起点にすると判りやすい。左岸を上流へ向かって歩く。河越しに見上げる王宮などはそれなりに良いのだが、川岸にずらりと繋留されているレストラン船が目障りだ。しかし単に遊びで歩いている人間の思いと、生活がかかっている人々のそれを較べれば後者が重いかもしれない。

10分ほどで鎖橋に到達した。インターネットで、「ブダペスト」を画像検索すると、国会議事堂と共に一番多くヒットする。いわばブダペストの顔と云えるような橋だ。

正式名称はセーチェーニ鎖橋で、建設資金として多額の私財を提供したセーチェーニ・イシュトヴァーン伯爵にちなむ。鎖橋と通称されるのは、強力なメインケーブルとしてチェーン(両端に孔の開いた铸铁板をピンで繋いだもの。自転車やバイクのチェーンに似た構造で、日本語の鎖とはイメージが異なる)を使用したためだ。

閑話休題。橋を渡ってブダ側に行くと、正面の丘上には王宮が聳えていて、これを見物しようとする観光客がケーブルカー駅に長蛇の列を作っていた。しかしこれらの見物は明日以降のこととし、踵を返してペスト側に戻る。

河沿い遊歩道を、王宮やマーチャーシュ教会がすっきりした姿を見せないか、振り返りながら上流へと辿る。しかしこれと云ったカメラアングルが見付からないまま、国会議事堂前辺りに至った。ここから先は工事中で遊歩道が閉鎖されている。時刻も12時を廻っていたし、こんなぐずついた天気のもとでは思ったような撮影もできなさそうなので、昼食に切り替えた。英ガイド推奨のクラススを目指す。

橋から東へ通じるヨーゼフ・アッティラ通りを行き、バイチジリンスキ通りと交差する。近くに聖イシュトバーン大聖堂のドームが偉容を示しているが、これも明日以降の対象だ。交差点を渡ると、通りはアンドラーシ通りとなる。ブダペストでもっとも繁華な通りで、日本ならば銀座通りといった感じか。しかしアンドラーシ通りは世界遺産なので、こちらの方が格上と云えそうだ。

地下にはヨーロッパで最古の地下鉄(1894年開通)が今なお現役で走っている。1987年に世界遺産登録された「ブダペストのドナウ河岸とブダ城地区」だが、2002年にアンドラーシ通りと地下鉄が拡大登録された。

通りの両側には国立歌劇場やルイ・ヴィトン、バーバリーなどの高級ブランドが建ち並んでいる。しかしそれでいて雰囲気はそれほどよそよそしくなく、どこか庶民的なのは東欧ゆえだろうか。目指す食堂クラッスはこの通りの41番地にあるはずだ。方向音痴なことは自覚しているけれど、今回は道に迷うこともなく順調に進んだ。そう思った途端に、最後のところで間違える。店の真ん前まで行ったのに、道路に看板などが見付からず、店構えを見てなぜか食堂ではなくカフェだと思い込んでしまった。しばらく辺りを探し回り、挙げ句の果てに、「引っ越したのか?」と思い込む始末だ。

ともかく仕方がないので午前中にドナウ河畔で見かけて、「良さそうだな。」と思った店に変更した。来た道をほぼそのまま戻り、半時間弱で目指すデウバリに辿り着く。時刻は1時10分で、食事タイムと思うが店内に先客はいなかった。

年配ウェーター二人が迎えてくれる。どのテーブルでも良いとのこと、比較的奥の窓際を選んだ。渡されたドイツ語と英文併記のお品書きではドイツ語が上に記されている。歴史的に云えばオーストリア=ハンガリー二重帝国を経て現在に至るのだから、ドイツ語の浸透がかなり残っているのだろう。

あまり食欲もなかったもので、比較的軽そうなチキンパプリカとダンプリング(小麦団子)を一品だけメインから選んだ。それでもワインは外せない。しかしリストを見てもさっぱりなので、ウェーターのアドバイスを請い、彼の奨めるアルダシュに即決した。すぐにワインは到着し、形ばかりのティスティングを終え早速飲み始める。

ちなみにティスティングする目的は、コルク栓の壘内部側に生えたカビの匂いなどがワインに移っていないかなどの品質チェックが目的だと云われている。これまでに数百回していると思うが、未だかつて、「ノー」と云いたいような代物に出会ったことはない。しかしネットで調べると、ブジョネと呼ばれるこのような不良品は40本~50本程度に1本あるそうだ。



デウバリの店内。

# ÁLDÁS

EGRI BIKAVÉR 2009

## ST. ANDREA

ワインのラベル。ネットで調べたところ、これと同じ2009年ものが5,500Ft(2,020円)で販売されていた。



チキンパプリカとダンプリング(小麦団子)。



仕上げのカプチーノ。

閑話休題。ウェイターが去った後、壺を手に取りゆっくり閱讀す。ラベルの下部には egri bikavér(エグリ・ビカヴェール)の文字が記されていた。訳せば、「エゲルの雄牛の血」で、これには逸話がある。

エゲルはハンガリー北東部の有名ワイン産地だが、16世紀半ばに強大なオスマントルコ軍の侵攻に遭い危地に陥った。ハンガリーの国民的英雄ドボー・イシュトバーンは自軍の兵士

に地産の赤ワインを飲ませ士気を鼓舞し、ついにトルコ軍を追い返すことに成功。その際、赤ワインを飲んでいる姿をトルコ兵が見て「ハンガリー人は雄牛の血を飲んでいる！」と恐怖したとの伝承から、地産赤ワインをこのように呼ぶらしい。トルコはモスLEMだから赤ワインに馴染みがなかったせいだろうか。

話が脱線ばかりするが、ワインを飲みながら待つこと十数分で、チキンパプリカが登場した。日頃馴染みのないハンガリー料理は、連想するものと云ってパプリカぐらいだ。そんなことで、お品書きに目を通していったとき、「魚も、豚も、牛

もイマイチだな．．．」と思いながらチキンパプリカに落ち着いたのも、パプリカの影響はかなりあった。

そして実際に食べてみれば、鶏肉自体が美味くパプリカが風味を良くしていると思う。しかし、「ヨーロッパ生まれの最も辛い料理である(ウィキペディア)」とまでは感じなかった。日常的に辛いものを好む結果、辛みに対して舌が麻痺状態なのだろう。ワインは僅かながら独特の癖があり、これが料理との相性という点で良かったらしく、気持ち良く飲み食いできた。

最後にカプチーノで締めくくり、勘定にする。ビールを持ってきたのは、食事が終わるころに二階から降りてきた肥満気味のオヤジで、どうやらチーフウェイトーらしいが、すこぶる感じが悪い。ワイン7,600Ft(2,791円)、チキン3,100Ft

(1,139円)、カプチーノ600Ft(220円)、サービス料565Ft(208円)、の合計11,865Ft(4,358円)をカードで支払おうとすると、「サービス料は現金でなければ駄目だ。」と云う。言い分に不当なことはないが、云い方が突っ慳食で、どういサービス業に従事する者とは思えない。おまけに1,000Ft札を出すすと、催促するまで釣りを出さない始末だ。せっかくの昼飯が

後味の悪いものになってしまった。



屋外用ガスストーブ。

しかし腹立ちを引き摺って歩くのも馬鹿々々しいので、「路上観察学」の実践に集中する。ドナウ河畔を離れ、ヴルシマルティ広場の方へ進んだ。街路は基本的に歩行者専用で商店や飲食店が多いし、通行者や辺りにたむろする人もいて、ちょっとした賑わいだ。

黒板に白墨で書かれたカフェのメニューにホットワインがあった。冬のヨーロッパではよく見かけるものの、試したことはない。通常は蜂蜜などを加えて、甘い飲料に仕上げているらしいので、食指が動かないのだ。

広場の外れではショッキングピンクの仮装を付けた連中が十数名いて、楽器を片付けているところだ。どんなパフォーマンスを展開していたのか不明だが、少なくとも画的には面白いものが撮れたらうに、僅かな差で惜しいことをした。

広場に接するデアーク・フェレンツ通りには設置されたばかりの屋台店が並び、まだ二ヶ月も先なのに、クリスマス気分を盛り上げている。



上左:ヴルシマルティ広場のテラス席カフェは無線LANが使える。上右:日本では見かけないが、ヨーロッパでホットワインはポピュラーだ。下左:輪タク。下右:(多分)クリスマス期間中の屋台店。



パフォーマンス集団。

デアーク・フェレンツ通は200メートル強でデアーク・フェレンツ広場にぶつかり終わりになる。小さな広場を横切ってみると、その向こうは交互二車線の幹線道路で、漫ろ歩きには不向きなようだ。踵を返し宿の方へ向かうだろうと思われる路地を選んだ。方向音痴は充分自覚しているが、この近辺ならば河と幹線道路に囲まれた狭いエリアなので迷ったところで高がしれている。



上左:干菓子やドライフルーツ、キャンディーなどの売店。上右:栗・デーツ・シナモン・かぼちゃ?・シナモン・ベイリーフ・レモン・唐辛子など形良くまとめている。装飾品かと思うが、以外に実用を兼ねているかもしれない。一つ1,100Ft(404円)は手頃な値段で、土産にしたいような気にもなるが、壊れやすそうだし、これから一月の旅に携行するのはゾツとしない。下左:ハム・ソーセージ屋。子豚(?)の写真が良い。下右:パウムクーヘン焼いていた。

3分ほど歩くと、小さな広場に面して教会がある。さほど大きくはないが、ゴシック形式のファサードは格調が高い。執筆にあたり調べたら、サービタ広場にある18世紀創建のサービタ教会だった。分厚い木製のドアを開けて中に入ると、頭上からオルガンの響きが降り注いだ。

意表を突かれ、一瞬ミニコンサートなどに紛れ込んでしまったかと思った。しかし落ち着いて内部を見回すと、ベンチに坐っているのは数人だけで、それも聴衆ではなく祈りを捧げに訪れた人々らしい。オルガン演奏は聴かせることを目的としたものではなく、多分奏者が練習をしているのだろう。

長いことコンサートと縁がないばかりか、自宅でステレオなどを聴くことさえ絶えて久しい。降り注いでくる曲はバッハの作品だろうと思いながら、ともかくベンチに腰を下ろし、カメラバッグやデイパックを脇に置き、コートを脱いで身体を寛がせて楽曲に耳を傾けた。

演奏の質を評価できるほどの音楽耳はないけれど、かなり高度な技量の持ち主らしく、メロディーはよどみなく流れて行く。そして何よりも素晴らしいと思うのは、教会全体が楽器となり、鳴り響いていることだ。流麗な調べを美しいものと聞きながらも、次々に雑念が湧いて音楽に集中できない。それでもこの場を立ち去りがたく、半時間弱を教会のベンチに坐って過ごした。

宿へ戻ると3時を廻っていた。午睡その他で時を過ごし、6時半にツマミなどの補充をするために買い物に出る。フロントで付近のスーパーマーケットを訊いたらば、玄関を出て右へ僅か50メートル、昨晚タクシーを降りた辺りだった。宿の立地が素晴らしいのを再認識する。

部屋に冷蔵庫もあることだし買い込んだのは、牛乳(2.8%)1 $\frac{1}{2}$ ℓ249Ft(91円)。エダムチーズ125 $\frac{1}{2}$ ℓ319Ft(117円)、酒を割るミネラルウォーター(炭酸)1.5ℓ119Ft(44円)、スライスされたソーセージ146 $\frac{1}{2}$ ℓ277Ft(102円)、ヨーグルト125 $\frac{1}{2}$ ℓ4筒249Ft(91円)、トマト210 $\frac{1}{2}$ ℓ126Ft(46円)など

晩酌を済ませると、いつも通り早々就寝。深夜若い女の子達の大声が聞こえたと思ったが、12時頃のこと、それ以後は静まりかえり、一番の音源はエアコンの送風音だった。しかしこのエアコンは音ばかりが大きく、暖房能力は貧弱だった。温度設定にかかわらず、19℃以上にはならない。寒くて困る様なことはないものの、思い通りにならないことが少しばかりもどかしかった。



サービタ教会ファサード。



サービタ教会内陣。

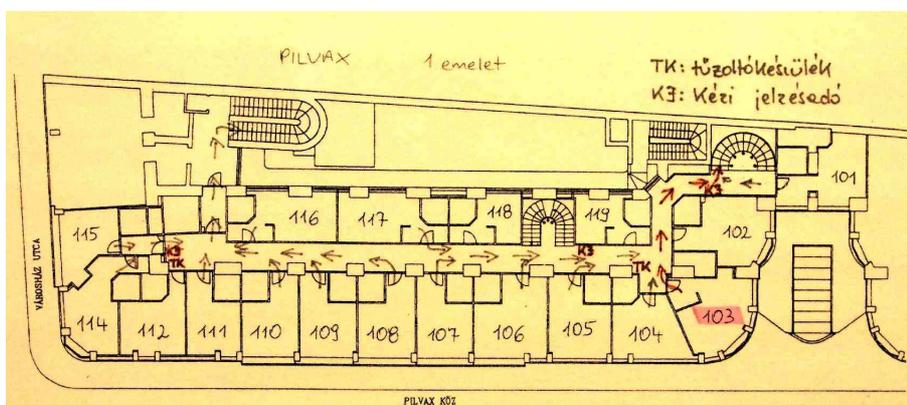
## 王宮とマーチャーシュ教会

30日は青空の広がる気持ち良い朝を迎えた。10時に宿を出て観光案内所へ向かった。僅か徒歩

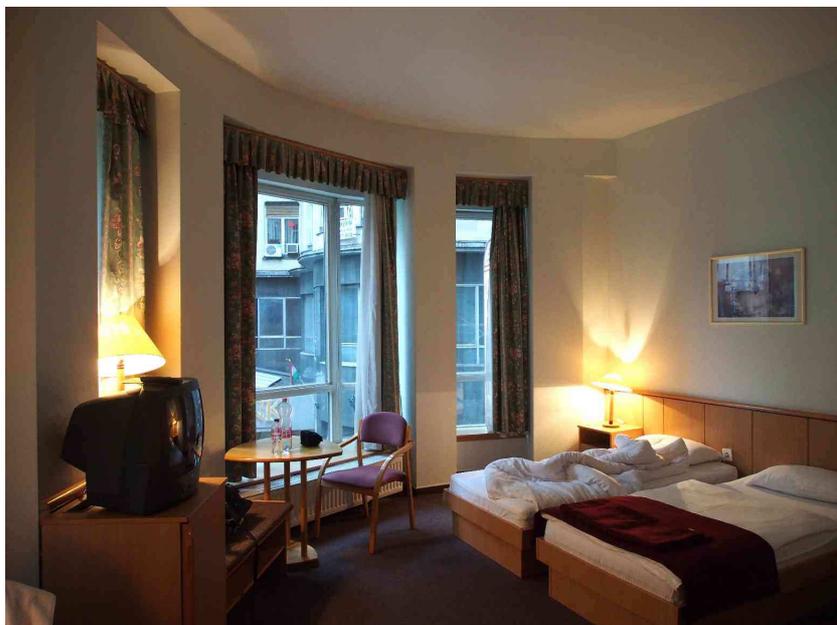
5分の所にあり、改めて宿の立地に感謝する。

ちなみにこれまでの旅では街に着いたらまず観光案内所を訪ねるのが常だった。しかしそこで収集する情報は、スーパーマーケットやインターネットカフェの所在で、今回はそのどちらも必要でなかった。今朝寄ることにしたのは、ハンガリーで訪問地候補の一つに挙げている、ホッロークーへの行き方が、英ガイドを読んでも具体的に判らなかったためだ。

案内所は10坪ほどの広さがあり、スタッフは女性二人、男性一人でいずれも30前後に見えた。女性の一人が対応してくれ、バスは地下鉄3号線で都心から3キロほど



宿二階の平面図。手書きで味わいがある。泊まったのは103号室で、道路とロビー屋上に面して大きなガラス窓。



103号室。11月1日の出発直前に慌てて取ったので、ベッドが寝乱れたままで撮影してしまった。

のネープリゲットバスステーションから出るとのこと（実際には誤った情報）だ。ホッロークーは、行くとしても二週間ぐらい先と思っていたので、取り敢えずこの程度の情報で満足し、礼を云って案内所を後にした。

次に目指したのは、昨日見かけて気になっていた聖イシュトバーン大聖堂（コラム参照）だ。バイチジリンスキ通りを辿って行くと、大聖堂の裏側にでた。内陣の外壁を見ても堂々たるものだけけれど、細工が粗いと云おうか、丁寧に作られたものではない。建設された時期は19世紀半ばから20世紀初頭で、オーストリア＝ハンガリー二重帝国時代だったため、ハプスブルグに対抗してハンガリーの国威発揚を意識し、殊更巨大なものを作り上げた様に思われる。

その結果、目立つところは豪華に装飾しても、資金的な制限もあつたらうし内陣の外壁みたい



バイチジリンスキ通りから見る聖イシュトバーン大聖堂。

### イシュトバーン

イシュトバーンはハンガリー千年王国の初代国王。幼名はヴァイクだったが父親ゲーザが国家経営のためにキリスト教に改宗した際、洗礼を受けてイシュトバーンとなった。国王として自国民のキリスト教化に努め、カトリック教会では列聖されている。

洗礼名であることから判る様に姓ではなく名で、同名の重要人物には国民的英雄であるエゲルのドボー・イシュトバーンや、鎖橋の資金提供者であるセーチャーニ・イシュトバーンなどがある。



聖イシュトバーン大聖堂のファサード。

に目立たないところは手抜きではないにせよ半ば見捨てられたような印象が漂う。

回り込んで正面玄関から内部へ入った。比較的広々とした拝廊(ナルテックス:教会堂の入り口もしくはロビー部分)の右手奥で数人の列が出来ている。並んで入るほどの教会かと訝しく思ったが、これは教会本体とは別に、有料の鐘楼へ登ろうとする人達だった。改めて見ると左手の奥に身廊へのドアがあった。

大聖堂の外形寸法は高さ96m、幅55m、奥行87.4mあり、内部空間もそれに応じた宏大なものだ。しかしそこに漂う空気は、かつて訪れたミラノのドゥオーモなどに較べ荘厳さとか神聖さが希薄なように感じられた。所詮は国威発揚のプロパガンダとして作られたものの限界とみなすのは穿った考えだろうか。

この教会で(不謹慎な言い方かもしれないが)目玉的な存在がイシュトバーンの聖遺物で、彼の右手がミイラとなったものだ。祭壇の裏側に安置され、コインを入れるとライトアップされる(日本語ガイドブック。以下日ガイドと略記)そうだが、そんなものを見る趣味はなく素通りした。

そんなことで教会堂内は短時間で終わりにしたけれど、鐘楼には登ってみる。500Ft(184円)の入場券を購入し、展望階の直下までエレベーターもあるものの、運動不足解消も兼ね階段を登った。展望台は主ドーム(キューポラ)の丸屋根直下部分に設けられ、一周できるので360度の景観を満喫できる。

好天气に恵まれ、視界良好だし陽射しは心地良い暖かさで風もない。見

物人は10人くらいいたが、展望回廊の直径が10メートルくらいあり、通路幅も擦れ違うに十分なものだったので混雑した感じは全くない。難点を云えば見下ろすブダペストの街並みはビルなどが多く、風情に乏しいことだろうか。それでも展望台を二周ほどして9枚撮影。



展望台から北(教会に向かって左)側鐘楼を望む。

大聖堂を出て王宮の方へ向かう。鎖橋でドナウ河を渡ると、ほとんど橋のたもとにケーブルカーの駅があり、標高差50メートルほどのところを運んでくれて、料金は400円ぐらいらしい。しかし乗り場からは100人程度が行列を作っている。二台が釣瓶状に交互上下して運搬しているから、それほど待たずに済むのかもしれないけれど、行列に並ぶのは嫌いだからやむを得ないときだけにしたい。

天候に恵まれたこの日、高々50メートルほどを登るのに、機械の助けを借りる必要などなさそうだ。歩き出してみると、坂道を登りながら景観が変化するのを楽しみ、好きなどころで立ち止まったり、戻ったり出来るのが好ましい。結局10分弱で丘の上に到達する。

登り詰めたところに小さな広場があり、その向こうに旧王宮がある。数十人の人ばかりが出来ているので何事かと覗くと、衛兵交替の最中だった。この手のものは好みでないし、バックingham宮殿のそれなどに較べると、遙かに小規模で貧弱だ。人混みの後ろを迂回してマーチャーシュ教会の方へ進んだ。

この辺りはおそらくブダペストで観光客の密度が一番高い場所と思われる、うろろろしているのは観光客かそれ相手の商売(仕事)人ばかりで、一般市民や住民はまず見かけない。団体と個人は6対4ぐらいだろうか。団体だとバスで来て、引率されゾロゾロ歩いて行く。二十人ぐらいの日本人グループと擦れ違う。

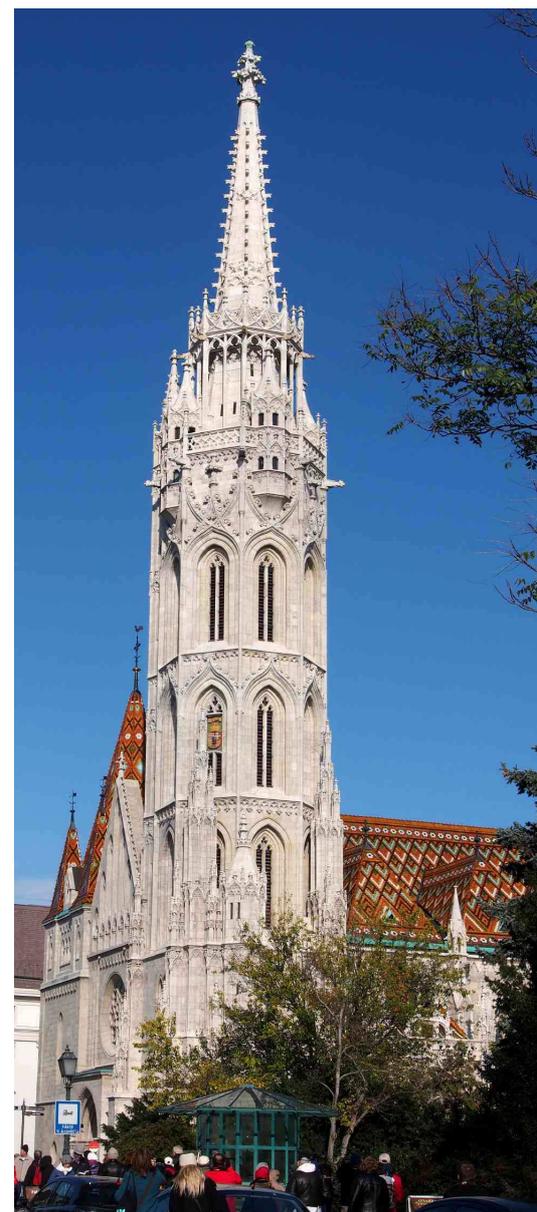
人混みは嫌だし、それが観光客ならばなおのことだけれど、マーチャーシュ教会だけは一応見ておきたかった。正式名称は聖母マリア聖堂で元々は1015年に建造されたらしい。1479年に塔の建造などを命じたマーチャーシュ1世の名で一般的には呼ばれる。先ほど聖イシュトバーン大聖堂の展望台から眺めた際にも、この塔を中心とした姿がすっきり美しく感じられた。



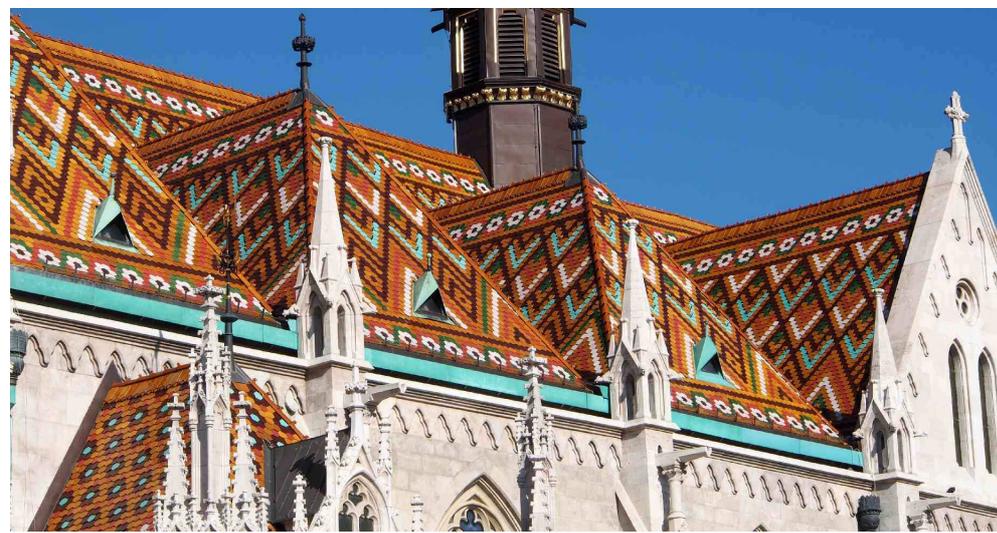
王宮の丘で坂を上りながらドナウ河越しに国会議事堂を望む。



王宮の門柱上に据えられたブロンズ像はマジャル族をカルパチア盆地に導いた伝説の怪鳥トウルル。



マーチャーシュ教会。



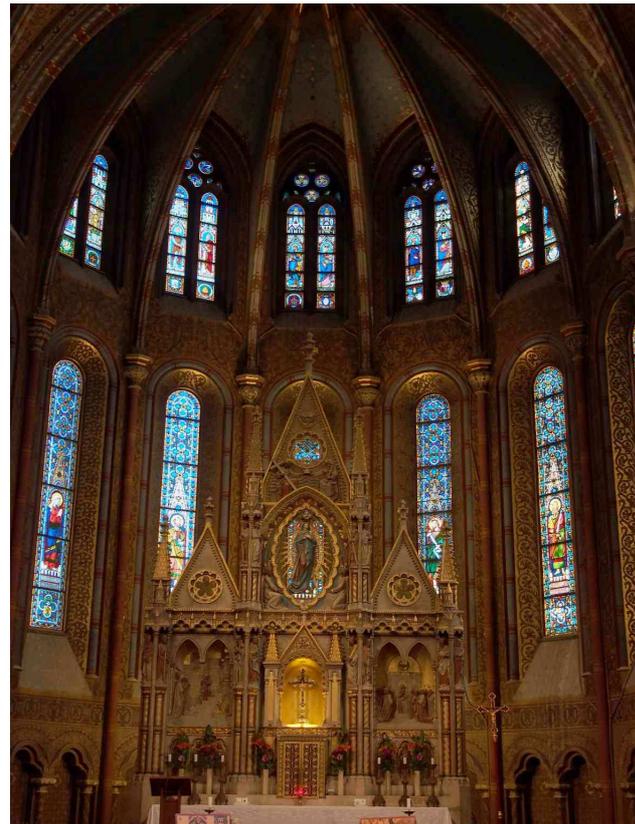
19世紀末に行われた修復工事による付加されたカラータイル屋根やガーゴイル付きの小尖塔。

しかし近くから見るといろいろな様式が交じっている。マーチャーシュによる建造や改築はゴシック様式だったが、その後オスマンによる占領時期にはモスクに改修されていた。さらに反トルコ神聖同盟

によるブダを取り戻そうとする戦闘は、教会の建物に大きな被害をもたらした。

オスマン撤退後に行われたモスクからキリスト教聖堂への復旧は基本的にバロック様式で行われたが、不十分なものだったらしい。その後19世紀末に13世紀の設計図に基づく本格的修復が行われたが、19世紀風の装飾も加わった。ジョルナイのタイルによる菱形模様瓦屋根などがそれで、時を同じくして19世紀に改築されたザグレブ(クロアチア)の聖マルコ教会屋根を彷彿させたのはそのせいかもしれない。

此処まで来たのだから内部も見物することにした。入り口に立つ係員に訊くと、少し離れたところにある券売所を教えてください。1,000Ft(367円)支払い、入場券とレシートを受け取る。引き返して途切れることなく入って行く観光客の流れに乗る。しかし入ってみていささかガッカリだったのは、内部の半分以上が修復工事のためか、足場が組まれシートに覆われ近付けないばかりか、垣間見ることも出来ない状態だ。それでも幸いなことに内陣側は修復対象ではなかったので、6枚ほど撮影し10分ぐらいの滞在時間で表へ出た。



マーチャーシュ教会内陣。

教会のすぐ後ろでドナウ河を見下ろす位置に漁夫の砦がある。これもフリジェシュ・シュレック(マーチャーシュ教会19世紀修復工事の指揮者)の作品だ。展望台として作られたもので、砦の機能はもとからない。名称の由来は、中世にこの辺りの防御線を担当したのが漁師のギルドだったためとのことだ。

どことなくエキゾチックで美しい塔と回廊の連なりに加え、眼下にドナウ河とその向こうにペスト市街を見晴らすので、観光客でごった返している。それを目当てにヴァイオリンやギターなどで投げ銭を稼ぐ姿もそこ此処にあり、ちょっとした祝祭空間となっていた。



漁夫の砦。

しばらくは華やいだ雰囲気を楽しんだものの、所詮人混みやお祭り気分は性に合わず、王宮の丘から北へ連なるオーブダ地区へ足を向けた。

この地区の歴史は古く、遡れば石器時代から居住が始まったらしい。その後ローマ人やマジャール人による都市が建設され、13世紀にペーラ四世により王宮の丘に宮殿が移されるまで、この地方の中心地だった。ちなみにオーブダ(Óbuda)はマジャール語(ハンガリー語)で「古いブダ」を意味するらしい。現在はどちらかと云えば閑静な住宅街で、観光客はほとんど訪れない。



漁夫の砦からドナウ河上流方向を望む。架かっているのはマルギット橋。二つ並ぶ青銅色の尖塔は聖アンナ教会で、その先にある尖塔は聖フランシス教会。

この方面を選んだのは、漁夫の砦から見えた尖塔(多分教会)を間近に見たかったためもあったが、日ガイドに、「感じの良いレストランが並んでいるけれど観光客は少なく、地元の人たちでいっぱい。」と書いてあったことにもよる。そんな店に巡り会えれば、時刻も12時近いことだしもちろん食事するつもりだった。



オーブダで見かけた格調ある建物。調べてみたら高校だった。

しかし探すべき地区は別だったのか、はたまた日ガイド情報がガセネタだったのか、レストランがありそうな雰囲気さえ感じられないままドナウ河河畔にでてしまった。聖アンナ教会そして聖フランシス教会も、共に正面玄関に達したもののドアは固く閉ざされていた。後者はともかく前者はファサードを見ても立派なものだった。調べたところ18世紀中頃に創建され、内部の主祭壇なども当時のものが今も残っているらしい。それらを見られなかったのは僅かながら残念だった。

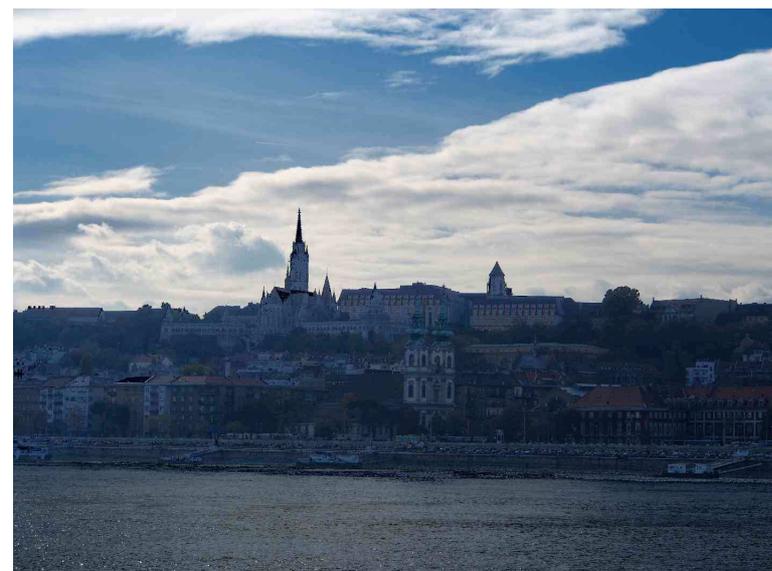
快晴無風の好天気背中を押され、もう少し歩き続けることにした。これと云った目標はなく、上流に架かるマルギット橋まで行ってこれを渡り、左岸を鎖橋まで戻る。そうすれば(昨日見付け損なった)食堂クラスで昼飯に頃合いの時刻となるう。



上: 聖アンナ教会のファサード。  
下: 見ることのできなかつた内部。



マルギット橋を渡る低床タイプの連接車。未確認情報だが、2007年からゾーメンス製が導入され1編成54mは世界最長だとか。



国会議事堂前付近から対岸を望む。一番高いところにマーチャーシュ教会。

マルギット橋は鎖橋に較ベユニークさで劣り、立地は観光客がほとんど訪れない所なので、知名度としてはかなり低いと思われる。しかし架橋されたのは1876年で、鎖橋の1849年に次ぎブダペストで二番目に古い橋だ。さらに橋の幅は25メートルあり相互二車線の自動車道路と幅の広い歩道に加え、中央部は路面電車が走り、交通に関する能力では鎖橋や三番目に建設されたエリザベート橋を凌駕している。

橋を渡ると国会議事堂が500メートルほど先に見えた。しかし河沿いの遊歩道を行くと、議事堂のすぐそばでフェンスにより遮断されている。下水管か上水管を埋設する工事が行われているのだ。しかし歩行者の安全確保と云うことに関し、日本のように神経質ではないらしく、フェンスの脇を通り抜けることは出来るし、立入禁止に類する看板はなく、ましてや監視員など影も形もない。その替わり工事箇所で怪我などしても、自己責任と云うことだろう。

工事自体は深さ1メートルほど掘削し、φ50センチくらいの管を埋設するだけで、脇を通過しても危険があるとは考えられない。迂回路はマルギット橋まで戻らないとならず、それも業腹だ。12時を廻って昼飯どきのせいか作業員はいなかったが、そのまま通り抜ける。

工事箇所の終点は、昨日河畔を遡ってきた終点でもあった。そこから先は既に一度歩いた道で、特筆することもないうまま1時をちょっと廻って食堂クラッスツに到着した。店内は比較的混んでいたが幸い空きテーブルに着くことができる。

ウェ이터から渡された英文併記メニューを一通り眺める。食欲は今ひとつなのでメインだけに絞り、日本では比較的馴染みのないダックにした。胸肉をローストしたものにフィットチーネなどが付け合わせらしい。ワインは全く判らないので、「ハンガリー産」だけを条件にウェ이터のお奨めを訊き、ワインリストで4,455Ft(1,636円)を確認してドージタマシュのメルロー(赤)にした。

ちなみに此処で供するワインは総て国産らしい。英ガイドによれば50種類ほどの在庫ワインから100ccグラスで試飲できるし、気に入ったものをボトルで買い求め持ち帰ることも出来る、ハンガ



左:クラッスツの店内。2時を廻ってから撮影したので空いている。右:外観。

リー産ワインのアンテナショップ的な所らしい。

待つほどもなくワインが供される。一緒にバゲット風のパンとオリーブの実が入った小鉢も運ばれてきた。お通しみたいなことだろうか。カリッと焼き上がったパンは暖かみが残っている。自家製なのかもしれないが、とにかく美味しいワインを飲みながら少しずつ食べるのが良い。オリーブもこれに変化がもたらされて好ましかった。

ワインから20分弱で鴨が登場した。細かい鉄網の格子模様がくつきり残り、焦げ茶色になるまで焼かれているが、断面は鮮やかなバラ色で瑞々しい。小片を切り取り口に運ぶ。肉汁もたっぷり濃厚な味わいだ。

鴨は他の肉と異なり、屠殺する際に血を抜かないように処理して、鴨特有の鉄分を含んだ風味を強調する手法があり、さらに客に供さない残部から血を絞ってソースに加えたりするそうだ。この店がそのような調理法を採用しているのか不明だし、鴨肉料理に疎遠な私には食べて判断など出来ようはずもない。しかし何となくそう考えると納得できるような風味だった。

ワインと鴨肉の相性も良かったし、快調にしかしゆっくり食事を楽しんだ。2時頃に完食し、カプチーノで締める。勘定はダック2,990Ft(1,098円)、ワイン4,455Ft(1,636円)、カプチーノ380Ft(140円)、サービス料785Ft(288円)。

宿への帰り道、昨日オルガンの壮麗な響きを楽しむことが出来たサービタ教会に立ち寄る。今回はひっそりして祈りを捧げる人がいるばかりだった。柳の下に二匹目の泥鰌はいなかったわけだが1枚のポスターを見付ける。

それによれば3月から11月の水曜日に、12時から12時40分までオルガンの無料コンサートが開催されると記されている。昨日は月曜日で時刻的にも合わないが、多分無料コンサートのために練習をしていたのだろう。

宿へ戻りついたのは2時半を回っていた。しばらく昼寝の後、メールチェックその他。6時になってすぐそばのスーパーマーケットで買い物をした。ポテトチップ77<sup>g</sup>229Ft(84円)、ブロッコリー・サラダ200<sup>g</sup>309Ft(113円)、ミネラルウォーター1.5<sup>L</sup>95Ft(35円)、ライ麦パン49Ft(18円)。晩酌後この日も早々就寝。



左:お通し(?)のバゲット。右:オリーブ。



鴨の胸肉ロースト。フィットチーネの上に乗っているのは洋梨。



街頭でスナップ。緑のジャンパーは制服で、自転車に書かれた文字からすると乗り降り自由巡回観光バスの切符売りらしい。



上左: 地下鉄駅の地上部。内部には切符売り場と売店。上右: 券売窓口と自動券売機。  
 中左: 赤い柱の上部に刻印機。内側に立っている男女が検札員。中右: プラットホームの乗降風景。下左: 車内。下右: 地上へのエスカレーター。

### 地下鉄

31日はどんより曇った朝を迎えた。ブダペストで見物したいところは一応昨日で終わっている。しかし次ぎにどこへ行くか候補は絞られてきても最終的踏ん切りがつかず、そして移動することを億劫に感じることもあって滞在を一日延ばすことにした。空いていたせいか宿は同じ部屋に居座ることが出来る。午前9時に落ち穂拾い的な街歩きに出かけた。

まず地下鉄に試乗。明日、他都市への移動はこれでブダペスト東駅へ行くことから始まるはずだ。地下鉄の最寄りは一デーク広場駅で徒歩5分だ。宿の立地が良いことに又々感心しながら駅へ向かう。

知ってしまえば赤い地下鉄マー

クなど判りやすい表示があったのに、地下鉄駅の地上部雰囲気は日本やこれまで私の経験したドイツ、スペインなどの異なった印象だったのでしばらくキョロキョロする。建物の中には自動券売機も設置されていたが、しばらく観察したところコインしか受け付けないようだし、操作法も券種の選択など面倒そうなので有人窓口に並んだ。

距離に関係なく片道1回(乗り換えは可)の料金が320Ft(118円)。500Ft札で支払うと、切符、釣銭の他に領収書が渡される。券売機ならばどうなるのだろう。



地下鉄切符実寸大。左上にある台形状の出っ張りはミシン目で上手く切れずにくっついてきたもの。刻印機により右側に切り込み、中央部に数字が印字される。

切符を持って同じフロアにある刻印機(改札機)の所へ行き、刻印しようとするが切符が上手く入らない。ミシン目で上手く切れていなかったのが原因で、この部分を自分で切り取れば済んだらしいが、ともかく勝手が判らないので愚直にそのまま刻印しようとした。刻印機のすぐ内側にいた検札員のオバサンが、見かねたのか近寄ってくると、出っ張り部分を折り畳んで刻印してくれる。

インターネット上に流れるブダペスト地下鉄情報では、検札員が厳しく切符なしはもちろん、刻印なしも問答無用で罰金を取られるばかりか、「事情のわからない旅行者が却って検札員の標的にされることもあるようだ。」などの記述があり、戦々恐々だった。1回だけの経験で、このような情報が間違いとは断定できないが、少なくとも彼等を警戒する気持ちは大幅に変化した。

長いエスカレーターでホームへ降りる。ちなみに地下38メートルでこれは日本最深の千代田線国会議事堂駅より1メートル深い。こんな深さになった理由はソ連の技術(方針)で建設され、核シェルターとしての利用が想定されていたためらしい。

三つ目のバロス広場駅が(鉄道のターミナルである)東駅(Keleti pályaudvar: ケレティ・パーリャウドウヴァル)の地下で連絡駅だ。なぜ別の名前にするのか理解できず、少なくとも旅行者に対して不親切だと思う。

東駅はブダペストに三つある鉄道ターミナルの中で最大であり、国内各方面への長距離列車と国際列車が発着する。1884年に完成した駅舎はそれほど大きくないが、当時はヨーロッパでもっともモダンな駅舎と云われたらしい。

天井から吊り下げられた大型インフォメーションは左が出発便、右が到着便を液晶で表示している。出発便を数えると

2時間に13本もあった。昨年利用したソフィア中央駅に較べれば、列車数、利用者数のどちらも遙かに多く、システムは近代的で、そして各種情報の表示がキリル



上: 東駅のコンコース。中央に表示板。  
下左: 国際列車切符売り場とインフォメーションの看板。下右: 国内列車切符売場看板。



東駅舎のファサード。駅前広場であるバロスは地下に4号線の駅を建設中。それに合わせて再開発工事が進行中のため板塀で囲われていた。

文字でないことが私には有り難かった。

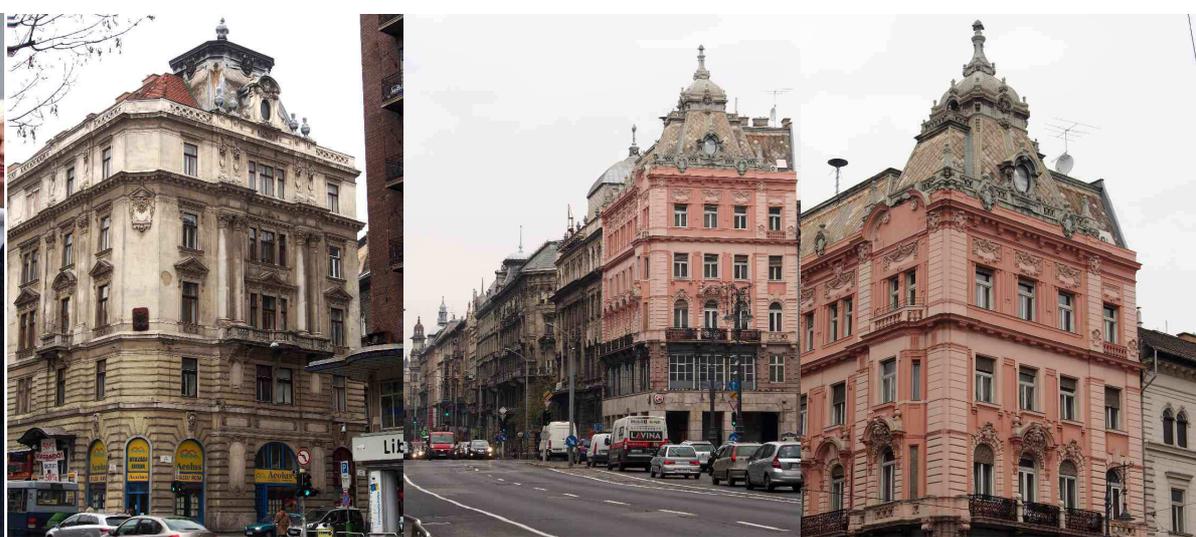
先ほど地下鉄で通過したルートの上になるラーコーツィ通りをエリザベート橋の方へ戻る。



ラーコーツィ通りで見かけたユーロ・ワン・ショップ。百円ショップの類だが此処に限らずヨーロッパの百円ショップは品揃えが貧弱で見ても面白くない。



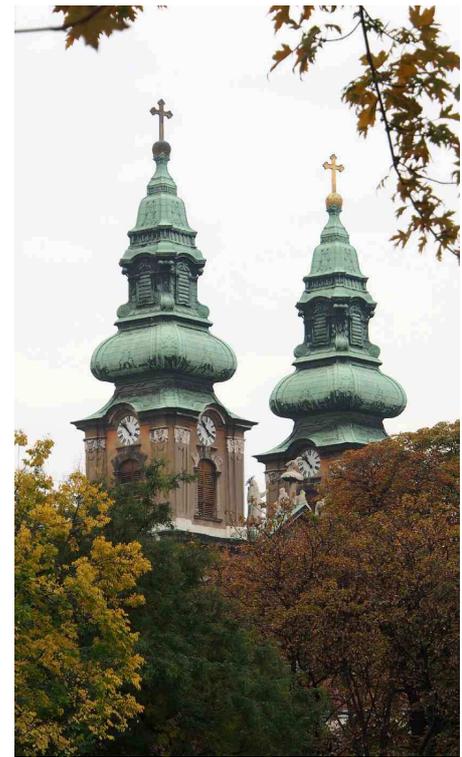
サンドイッチマン。ちなみに日本では絶滅したものと思っていたら、細々復活しているらしい。



ラーコーツィ通りにはかつてはその格調高さを誇ったであろうビルが建ち並んでいる。

車道は相互二車線で歩道の幅も広々しているが、交通量はそれほどではない。ハンガリーの乗用車所有率は日本の7割弱(P.4参照)だが、それよりも少ないような印象を受ける。沿道の建物はおおむね階高が揃っているのも、都市計画に従って建築されたのだろうか。今となってはくすんでみすばらしい感じもするが、丁寧に観察すればかつては格調高いものであったことが見てとれる。

ラーコーツィ通を途中で左折し、中央市場の方へ向かった。表通りを外れ路地を辿る。ブダペストの街路はそれほど錯綜していないので、方向音痴でも迷子になる心配はないし裏通りはほとんど車両の通行がないのでホッとす。小さな市街地公園があり、これを斜めに横切っていくと、樹木越しに教会の鐘楼が見えた。古色を帯び風格がある。尖塔を目印に近付くと、何とかファサードの前に辿り着いた。大学教会だ。18世紀に創建され、神学大学の付属教会だったので、大学教会と呼ばれているらしい。しかし残念なことに入り口のドアは閉ざされ、分厚い木の扉はびくともしない。入り口付近を見回しても、いつ開くのかを示すような表示も見付からなかった。



エジェテム(大学)教会の鐘楼。

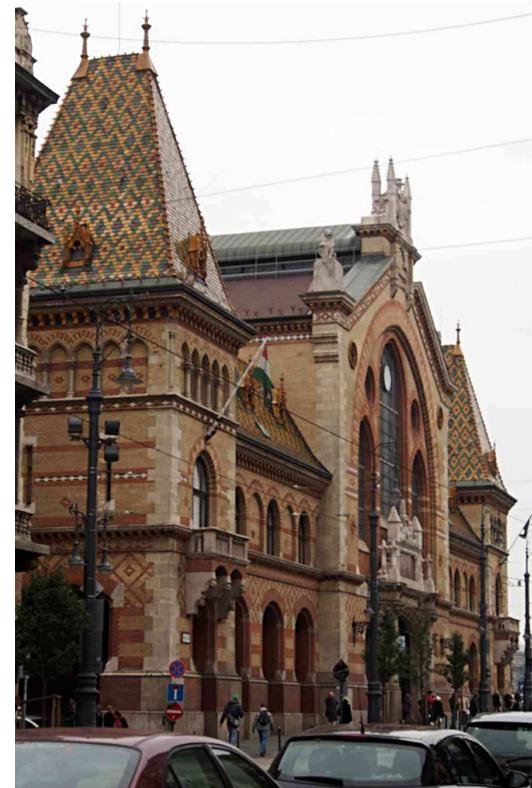


エジェテム(大学)教会内部。インターネットから採取。

## 中央市場

教会からしばらく行くとヴァーツィ通に出た。この通はアンドラーシ通りと共に、ブダペストでもっとも繁華と云われているが、アンドラーシが国立歌劇場や国際的に有名なブランドの大型店が多いのに対し、こちらは歩行者専用道路の両側に、比較的小振りな商店とそれに挟まれて飲食店などがある盛り場の雰囲気漂う通りだ。

南南西に僅か進むと、中央部分を路面電車の走る小環状線にぶつかる。斜め左手に中央市場のファサードが見えた。この通りは車輛の通行量も多いので歩行者用信号が変わるのを待って渡る。



中央市場のファサード。

入り口は二重の黒いカーテンで寒風が吹き込むのを防止している。ガラスの二重ドアなどではないところが、この市場に相応しい感じだ。1896年に建設されたそうだが、中央の屋根を高い位置に設け、その下にある大きなガラス窓から外光を充分に取り込み、開放的な雰囲気を作り出している。

市場の営業時間は朝6時の開場で、月曜日は午後5時まで、火～金は午後6時まで、土曜は3時までで、日曜全休らしい。訪れたのは

11時を少し廻った頃合いでかなり雑踏していた。食品類の市場を見て歩くのは好きだし、いつもはあれこれ買い込みたい衝動に駆られる。しかしなぜか今回は食指の動くものがなかった。

肉屋の店頭に並ぶハムやソーセージの多様さは、此処もまた肉食の国なのだと納得させられるし、八百屋や乾物屋に縄のれんのようにぶら下がるパプリカはこの国における消費量が莫大なことを示しているようだ。ちなみに(孫引きで2007年のFAO(国際連合食糧農業機関)統計データによると)パプリカ類の(唐辛子系の香辛料としての)消費量は、世界一位がボスニア・ヘルツェゴビナで19.59g(人/日)、二位がハンガリーで17.29g、日本は僅か0.27gだ。辛い食べ物を好む国との印象が強いタイが2.68g、韓国は0.67gなので、消費量は食べ物の辛さとは直接関係なく、辛くない唐辛子系を大量に使用



上左:中央市場のメイン通り。上右:肉屋はハム、ソーセージの品揃えが豊富だ。中左:パン屋。中右:ハンガリー名物のパプリカが縄暖簾状になっている。下左:フォアグラの缶詰各種。下右:ピクルス類。



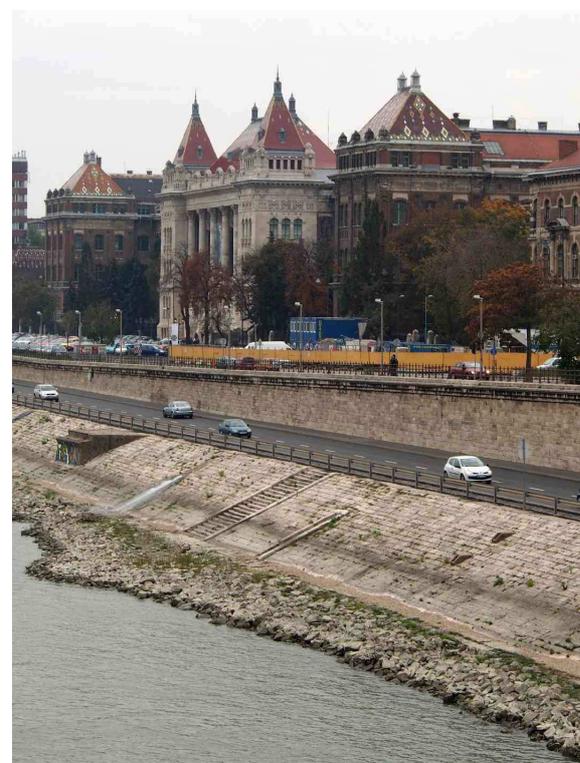
ハンガリー観光局のページで中央市場を調べたら、顔をかたどったピクルスが紹介されていた。慌てて撮影済み画像を調べたら小さく写っている。それを部分拡大。

して辛い料理を好む国が上位を占めているらしい。

閑話休題、場内を巡回する。二階には衣料品、刺繍その他の土産物的な品物とレストランがあったけれど、興味が湧かずすぐ一階へ戻る。結局20分ほどで場外へ出てしまったが、後で地下にはジビエの店もあったと判明。行かなかっただけに何か面白いものを見損なったような気がする。要するに、「逃した魚は大きい。」心理だ。



自由橋。



自由橋から右岸にあるブダペスト工科経済大学を見る。

市場を出て前の幹線道路を左へ行く。すぐ自由(サバドシャーク)橋が古風な姿で架かっている。もとはフェレンツ・ヨーゼフ(オーストリア=ハンガリー帝国皇帝)橋と呼ばれ1899年に完成した。しかし第二次大戦でドイツ軍が撤退する際に破壊され、現在のものは戦後に復元したものだ。共産主義時代に名称も変更されたようだ。



エリザベート橋。

橋を渡って右岸を上流方向へ向かって辿る。景観その他、面白味のないところだった。10分足らずでエリザベート(エルジェーベト)橋にいたる。この位置には1903年に完成した吊り橋があり、オーストリア=ハンガリー帝国皇后のエリザベートの名を冠した。しかしこれもドイツ軍により破壊され、現在のものは1964年に架橋されたものだ。資金的な問題により新工法が採用されたらしいが、この橋が世界遺産の対象となっているのは理解に苦しむ。

この橋でペスト側に戻り、宿でトイレなど使い一休みする。しかし12時を廻っていたので間もなく昼食のために出かけた。目指すは昨日と同じラッスッド。

さすがに道を間違えることもなくアンドラーシ通りに出てこれを右へ行く。6、7分で国立オペラ座の前に来た。一昨日、昨日と注目しながらも素通りしていたが、日ガイドがあまりにも賞賛するのでともかく立ち寄ってみることにした。

公演は月曜日以外連日あるが、マチネーは日曜日だけなので劇場周辺は通行人と数人の観光客がいるだけで閑散としている。玄関ホールも同様で、営業しているのは小さな売店風のオペラ・ショップだけだった。ホールの天井や、劇場へ通じる上り階段通路を垣間見ただけでも、内部の豪華絢爛さが偲ばれる。

ホールの掲示によれば、劇場内部を40分で廻るガイドツアーがあり、3時と4時にスタートする。料金は2,900Ft

(1,065円)で、撮影する場合は別途500Ft(184円)かかる。内容からすれば安い価格設定だと思ふものの、ガイドツアーは嫌だし食事を済ませて宿へ戻った後、再び此処へ赴く気にもならず、結局内部見物はなしとした。



国立オペラ座の玄関ホール天井。



国立オペラ座の外観

クラッスッに着いたのは1時近くになっていたが、店内は昨日より空いていた。昨日のテーブルは通路の間に島になったように置かれ、落ち着かない思いだったので、奥の方へ進む。6段ほど階段を登り、壁際のさらに一段高い席に坐った。壁際にはびっしりワインの壘が並び、さすがはワインの品揃えを誇る店と納得。



上左:店内奥の部分。一段高くなり客席もあるがワインが各種並んでいる。上右:ウォルドーフ・サラダ。下左:ワイルド・ボア。下右:カプチーノ。

野菜不足を感じていたため、お品書きを見てウォルドーフ・サラダをどんなものか良く判らないまま注文した。メインは昨日から気になっていたワイルド・ボアのシチュー。日本で試す機会の少ないジビエには食指が動く。ワインは昨日飲んだドージタマシュのメルローだが、一本は多いような気がしてグラスで頼む。

間もなくウォルドーフ・サラダが登場。英辞郎(インターネット辞書)によればこの品は、「セロリとさいの目に切ったリンゴとクルミをマヨネーズであえたサラダ」だそうだが、実際に供されたものはこの材料以外にミニトマトやベビーリーフ、紫キャベツなどが小綺麗に和えられていた。サラダと一緒に出された黒パンが美味い。自家製なのかカリッと焼き上がって暖かみがまだ残っている。これとサラダでワインが進む。

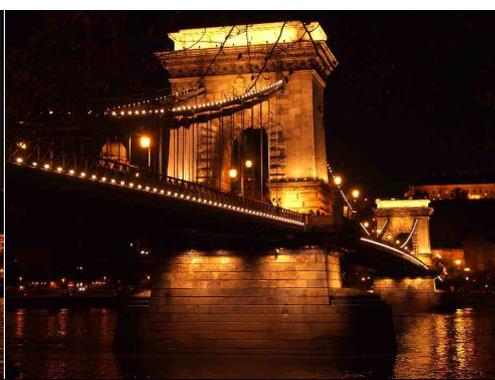
そしてサラダに遅れること20分でメインが登場した。野猪のシチュー、ダンプリング添だ。画像を見れば判るように日本人のイメージするシチューとはちょっと違うようだ。しかし肉塊などをトロトロ煮込めばそれは総てシチューなのかとも思う。肉は美味しいと思ったが、ダンプリングは一昨日も感じたように相性が良くなかった。

締めのカプチーノは表面に綺麗な模様が乗っている。最初にこの手の装飾を見たのは2007年のミラノだったが、近年ラテ・アートなどと呼ばれ技能を競う世界大会なども各地で開催されているそうだ。ちなみに昨日のカプチーノにラテ・アートが施されていたかは記憶にない。これができるバリスタ(バルでコーヒー関係を扱う職人)が不在だったのかもしれない。

勘定はサラダ1,790Ft(657円)、シチュー2,590Ft(951円)、グラスワイン5杯3,700Ft(1,359円)、カプチーノ390Ft(143円)、サービス料750Ft(275円)だった。

## 夜景

宿へ帰って一眠りしてから、ブダペストとも今夜が最後かと思いながら、日ガイドのブダペスト部分を拾い読みした。それまで読み流していたところで改めて目を惹いたのは夜景に関する記述だ。



「多くの都市で素晴らしい夜景を体験し、見飽きてしまった人でもブダペストの夜景に感動しない人はいない。」とベタな表現で感心しないが、夜景そのものには興味をそそられた。晴れていて無風だし、5時を廻ったばかりだが僅かに残照が残るだけで、ドナウ河畔に達する頃にはとっぷり暮れているだろう。晩酌の前に散歩がてらの夜景見物に出かけることにした。

歩行者専用のヴァーツィ通へ出ると、かなりの人混みだ。テラス席のカフェで飲食する人も多く、全体にゆったりとしたムードが漂い、行き交う人に退勤途上と云った雰囲気

気はない。このときには全く気付かなかったが、翌日の11月1日は万聖節で休日なのでその影響もあったかもしれない。

ドナウ河畔の遊歩道も同じように散策する人が途切れしない。気温は6℃で、風がないからコートを着ていれば厚着していなくても寒さを感じない。

日本で夜景が有名なのは、函館、神戸、長崎辺りらしいが、見たことがあるのは函館だけだ。函館が良いのは函館山という手頃な展望台があり、そこから見下ろすと両側から海が迫り、ちょうど光の海の中心部となる函館駅前辺りで両側が黒く塗りつぶされたようになる。これが街に点る明かりのコントラストを強調するためだと思う。

それに対してブダペストはなんと云ってもドナウ河だ。ペスト側から見ると、対岸の丘に聳える王宮や教会のライトアップされた姿が川面に映る。流れによって出来るさざ波にこの光が揺らめくのが効果を一段と増幅するようだ。

鎖橋に達して考える。日ガイドは王宮の丘から見下ろす鎖橋の電飾を絶賛するが、その写真はつまらないものだったし、ペスト側でライトアップされているのは聖イシュトバーン大聖堂ぐらいなのでつまらなそうだ。結局橋は渡らず、もう少し上流まで歩いてマーチャーシュ教会や鎖橋の撮影を続けた。

鎖橋から10分強歩いてさらに上流方向へ移動しても良いアングルはなさそうだと見極めを付ける。時刻はまだ5時40分だけれどそろそろ晩酌に切り替えたくなくなった。

鎖橋まで戻り、此处で河畔を離れドロツチャ通りを行く。間もなくヴルシマルティ広場に出た。広場を取り巻く商店やカフェのイルミネーションが明るく点り、広場に並べられたテラス席にもかなりの人が憩っていて、どこか祝祭空間的な趣もあった。

大道芸人の演奏するメロディーに合わせて踊る男女のグループや、その隣でこれも大道芸らしいサクソフオンを吹くオヤジがいる。ちょっとした手押し車に、アンプやスピーカー、小型リズムマシン(?)などを積んできたらしく、それをセットしての熱演だ。その前に立って肩を組ながら歌っているのは、男性ばかり7人で学生かもしれない。歌は下手だけれどもとにかく楽しそうだった。

ヴルシマルティ広場からヴァーツィ通を歩き、宿のすぐ手前にあるいつものスーパーマーケットで買い物。ウォッカ(フィンランドニア)700cc3,699Ft(1,359円)、パン59Ft(22円)、ソーセージ122<sup>グラム</sup>232Ft(85円)など。

宿へ戻りついてみるとまだ6時半にもなっていない。ゆっくりシャワーを浴びる。室温は4泊して、ようやく22℃まで上がるようになった。長期空き部屋で冷え切っていたのだろうか？

明日訪れるジュールの予約をして貰うためにフロントへ降りた。英ガイドで候補四つをマーカーで塗り、赤ボールペンで優先順位を書き込んである。これを見せるとフロントマンはすぐ理解してくれて、電話をかける。最初のところで簡単に決まり、念のためか一泊朝食付きの値段をメモ用紙に書き出して確認してくる。異存がないことを伝えると、これで予約は完了した。

部屋に戻りジュールのことをガイドブックで拾い読みしながら晩酌。この晩も相変わらず静かだった。



ヴルシマルティ広場の賑わい。



先ほど購入したソーセージで晩酌。